新春対談

さいたま市長
清水勇人

作家（『のぼうの城』『村上海賊の娘』等著者）
和田 竜

進行　渡辺美紀

対談会場：さいたま市役所 市長室

ベストセラー作家も認める「住みやすさ」

「のぼうの城」や「村上海賊の娘」の著者で、さいたま市在住の作家、和田 竜さんをお迎えして、作品の魅力やさいたま市の文化・歴史、市内での生活についてお話をお聞きしました。

市長：本日は、大変お忙しいところお越しいただきまして、ありがとうございます。よろしくお願いします。

和田：よろしくお願いします。

渡辺：早速ですが、和田さんは著書「村上海賊の娘」で吉川英治文学新人賞、本屋大賞を受賞されましたね。

市長：おめでとうございます。

和田：ありがとうございます。ここまでの評価をいただくとは思っていなかったので、うれしくもありますが、ちょっと驚いています。

渡辺：和田さんは、ほかにも、歴史を背景にした時代小説を書かれていますが、清水市長も読まれましたか。

市長：はい。和田さんの作品は、主人公だけではなく、登場人物がそれぞれ非常に魅力的ですよね。人間味があるだけではなく、現代的で、とても楽しく読ませていただきました。

渡辺：人物設定には、やはり和田さんのこだわりがあったのでしょうか？

和田：その人が置かれた状況から、こんなことを思うんじゃないかなとか、戦国時代にも日常はあるわけで、そういう中で

「結婚を機にさいたま市に住むようになりました」

日常的な会話ってどんなふうになるんだろうみたいなことを考えながら書いていますね。

「村上海賊の娘」は、さいたま市で書き上げた!?

渡辺：構想して、作品を書き上げるまで、膨大な史料を読まれたのではないかと思うのですが、例えば「村上海賊の娘」では、どのくらいの期間が掛かったのでしょうか。

和田：史料読みに1年、僕はその後一度シナリオに起こすのですが、これに1年。連載から加筆・修正で2年半の計4年半くらいかかりました。

市長：4年半！

和田：結婚してさいたま市に住むようになって、その3か月後には「村上海賊の娘」の取材を始めていました。新婚生活はほぼずっとこの「村上海賊の娘」と共にありました。

市長：ということは、さいたま市で書かれたんですね！

和田：はい。史料は市内の喫茶店で読んだりしていました。あとは近所を散歩しながら考えていると、ああ、こういうふうにしたらいいのかとか思いついたりします。

渡辺：私も以前、さいたま市のテレビ広報番組のリポーターをしていて、市内のいろいろなところを巡りました。

　さいたま市内には歴史を感じられる場所が多くて、例えば、岩槻城は「のぼうの城」でもちょっと登場しましたよね。

和田：岩槻城址公園には僕も行きました。土塁の跡とか残ってますね。

市長：現場へ行くと、いろいろと創造力がかき立てられたりするんでしょうか。

和田：実際にそこにいた人物に何が見えていたのかがわかったりするんですよね。例えば、「のぼうの城」の忍城（おしじょう）であれば、本丸で話していたとすると、その目線の先には池があって、その先に関東平野が広がっているんだな、とか。

市長：市内には他にも、歴史を感じられる場所があって、例えば見沼田んぼは享保の改革により干拓していくわけですけれども、そういった歴史があって今でも首都圏有数の緑地空間として残っています。

和田：ほう。

市長：大宮盆栽村は、関東大震災のときに、東京にあった盆栽園の人たちが集団で移住して、まちができた。

　それが盆栽町という地名になって、国内外から多くの方が訪れるようになっています。

和田：そうなんですね。

市長：はい。いろいろな歴史が、その後の文化を生み出しているというところがあります。

　歴史を知ることがすごく大切ですし、それが文化につながったり、住んでいる人たちにとっても、誇りになるのかなとも思います。

もともと、そこまで歴史好きではなかった!?

渡辺：和田さんは子どもの頃、広島で育ったそうですが、その頃知った歴史が作品に影響したのでしょうか？

和田：「村上海賊の娘」を書いたのは、小学生のころ広島の尾道市にある因島に行ったときに、ここに海賊がいたんだ、と知ったのがきっかけです。でも、小さいころから歴史を体系づけて知ろうだとか、そういうようなことは特に思ってなかったですね。もともとそんな歴史好きではなかったので。

渡辺：それは意外ですね！

市長：和田さんの場合、歴史小説をずっと書かれているわけですけど、たまたま書きたいものが歴史の中から生まれてきているということなのか、それとも、歴史小説にこだわって書かれているのか、その辺はどうなんですか。

和田：両方ですね。歴史小説を書くのはなぜかと言うと、やはりそれが、現実の人間がこういう状況のときに、こういう判断をして、こういう足跡を残したということが僕にとっての励みでもあったので。

渡辺：励みですか。生きていく上で。

和田：はい。一方で、僕はバトルものが好きなので、やはり戦国時代ということになってくるんですね。そういう僕の創作上の都合というのも、またあると思います。

市長：なるほど。

渡辺：和田さんの本を読んだ人が、同じように励みになって、自分も頑張ろうと思えたり、勇気を得てほしいとか、そういう思いがありますか。

和田：ありますね。

さいたま市の図書館でも史料を調べていた!?

渡辺：読書と言えば、さいたま市は、図書館の貸出冊数がとても多いんですよね。

市長：平成24年度の市民1人当たりの貸出冊数が政令指定都市ナンバーワンという統計結果があります。図書館の数もさいたま市は政令市ナンバーワンなんです。

和田：じゃあ、本離れと言われる中、読書をする人が多いんですね。

市長：そうですね。図書館の集客力も高いと思います。

和田：たしかに、かなり多くの方がいらっしゃいましたね。

渡辺：和田さんもさいたま市の図書館を利用しているんですか!?

「子どもたちの読書に対する関心の高まりを感じています」

和田：はい。史料を読んでいたことがあるんですよ。本を売っている者にとっては複雑ではあるんですが(笑)。

僕の場合は古い本ですけど、古書店で買ったらかなりの値がはるような本を借りて読んでいますね。そういう面では、図書館は必要かなと思っているんですけど。

でも、本を読む人が多いという事は、もうこれだけ読書離れ、本離れと言われている中で、いい事ですよね。

市長：そうですね。アンケートでは、市内の小学4年生から高校生の8割以上が「本を読むことが好き」と答えています。

学校訪問で市内の学校に行っているんですけど、朝に設けられた読書の時間に本をよく読んでいますね。

和田：そうなんですか。

市長：はい。さいたま市の場合は、学校に学校図書館司書がいるんですよ。「日本一読書が好きなまち」、ということをテーマに、学校図書館の運営や、本を読んでもらうための取り組みを行っています。

貸出冊数が多いことからも分かるとおり、本を読む事が好きな子ども、あるいは大人が多いという事もまた事実ではないかなと。

和田：なるほど。

市長：さまざまなかたちで本と身近に接していると思います。ある学校では、廊下に本棚があって、そこに座って読めるスペースもあるので、学校図書館まで行かなくてもいいんです。

保護者や地域の方もすごく協力的で、子どもたちに読み聞かせをしてくださるんです。そういう協力もあって、読書に対する関心が子どもたちにすごく湧いてきているのかなと思います。

和田：そうなんですね。僕なんか、小さいころは本を読むのは好きじゃなかったので…。

渡辺：え?そうなんですか!

和田：いま聞いて思ったのは、とりわけ小さい子にとっては文字を読むのは、まだ少し難しいんですよね。だから、読み聞かせから入るって、いいなと思いました。

そこから、本って面白いんだというのが分かって。じゃあ、自分で読んでみようという、1つのステップとして、読んで聞かせるというのはありだなと、話を聞いて思いました。

「実は小さい頃は読書が好きではなかったんです」

芸術家が住むまち

渡辺：和田さんは、本が好きな人が多いまちで執筆をされていることになるわけですが、執筆活動の場として、さいたま市はいかがですか。

和田：いい塩梅(あんばい)で人がいたり、いなかったりするんですよね。都内だと人が多過ぎて。喫茶店でも、程よくお客さんがいるから、史料も落ち着いて読めます。

渡辺：お気に入りのお店はありますか?

和田：本がいっぱい置いてある喫茶店とか、古民家というか納屋を改造したようなカフェがあって気に入ってます。

市長：ほう。

和田：ある古民家カフェにはギャラリーがあって、2週間に1度、内容を変えていくんです。なんかそういうのが面白くて。さいたま市には文学作家の他にも、陶芸をやったりだとか、何

かつくったりだとかという人が、結構住んでいるんだなという事をそれで知りました。

市長：そうなんです。かつて「鎌倉文士に浦和画家」と言われたように、市内には今も芸術家が住んでいて、平成28年に、国際芸術祭「さいたまトリエンナーレ2016」を開催する予定です。

渡辺：平成29年には「世界盆栽大会」も市内で開催するんですよね。

市長：はい。いずれも市民の皆さんが一緒に参加できるようなものを企画したいと思っています。歴史的な背景を踏まえながら、過去と未来をつなぎ、さいたま市の魅力を世界に知っていただけるきっかけになればと思っています。

これ以上便利なところはないんじゃないかってくらい住みやすい！

渡辺：実際に住んでみて、さいたま市のイメージはいかがですか？

和田：住んでみると、とにかくもうこれ以上便利なところってないんじゃないかというぐらい、住みやすい。住みやす過ぎるんじゃないかというぐらい。買い物とか、映画を見に行ったりとか。あとメシがうまい（笑）。

市長：市民意識調査でも8割以上の市民が「住みやすい」「住み続けたい」と答えています。「交通の利便性が高い」というのもありますね。

渡辺：今後、さいたま市はこうなってほしいという思いはありますか？

和田：僕は陶器市とかに行くのが好きなんですが、そういう文化村みたいな。市内にも古民家カフェとかがあってすごくいいんだけど、そういったものが集まって1つの空間になっているような所があれば、さいたま市に対するイメージもまた変わるんじゃないかなと思います。

今年の抱負、そして次回作に向けて

渡辺：では最後に、今年の抱負をお聞かせください。

和田：一昨年の10月以降本を書いていませんし、何の着手もしていないので、いよいよ今年は何か始めなくてはという感じですかね。

渡辺：さいたま市を題材にした小説を書かれる予定はありますか？

和田：どうでしょう？（笑）

市長：和田さんは、作品の中で、歴史の隠れた魅力を引き出したり、人物に魂を吹き込んだりするのが凄いと思うので、将来、何かの形で取り上げていただければと思います。

渡辺：和田さんの今後の作品を私たちも楽しみにしています。

市長：和田さんがさいたま市に住んで、執筆活動をしていただくというのは、市民にとっても誇りであると思います。今後もいい作品をさいたま市で書いていただければと思います。本日はどうもありがとうございました。

和田：ありがとうございました。

和田 竜（りょう） 氏

脚本家、作家。2007年、埼玉県を舞台にした「のぼうの城」でデビュー。2014年、「村上海賊の娘」で、第35回吉川英治文学新人賞、2014本屋大賞、第8回親鸞賞を受賞。

渡辺美紀 氏

MC、リポーター、ナレーター。市テレビ広報番組元アシスタント。